

# 褥瘡ケアのポイント

## 気を付けたい！

## 在宅での着眼点と

## 医療関連機器褥瘡

**痛**みなどの不快感だけでなく、感染症や組織の壊死など、利用者のQOLの低下などさまざまな弊害を引き起こす褥瘡。適切な対応をして悪化を防止したい。そこで、経験豊富な看護師であり研究・教育に注力されているお2人が、在宅でのケアのポイントと、新たな視点を解説する。

### Part1

#### 在宅での褥瘡予防・ケア 一傷だけでなく、暮らし全体を見ることの大切さ

褥瘡ケアは「傷だけを見る」だけではない

私は病院に勤務する皮膚・排泄ケア認定看護師として、褥瘡や創傷、ストーマや排泄に関するケアに携わっています。病院内で患者さんの皮膚トラブルに対応する一方で、往診医や訪問看護師から相談を受け、在宅療養中の方のご自宅へ同行訪問することもあります。褥瘡ケアに関わるたびに感じるのは、褥瘡は「傷だけを見ていても解決しない」ということです。傷の状態だけでなく、どのような姿勢で過ごしているのか、どのような寝具を使っているのか、誰がどのように介護しているのかなど、暮らし全体を見るのが大切です。

処置は丁寧でも、治りにくい褥瘡がある

以前、脳梗塞を発症して寝たきりとなり、仙骨部（おしり真ん中の骨が出ている部分）に褥瘡ができた80歳代後半の男性のご自宅を訪問したことがありました。その方は奥様と娘さんとの3人暮らしで、介護の中心は奥様でした。訪問看護は週2回入っていましたが、訪問看護がない日は奥様が傷の処置をされていました。数か月にわたり処置を続けてもなかなか改善せず、ご家族も訪問

看護師もケアマネジャーさんも悩まれていました。往診医から依頼を受け、傷の評価と処置方法の確認を目的に、訪問看護師と一緒にご自宅へ伺いました。

傷を確認すると、以前の写真と比べて大きさに変化はありませんでした。しかし、強い赤みや腫れ、膿のようなもの、悪臭など、明らかな感染を疑う所見はありませんでした。むしろ傷の様子からは、ご家族と訪問看護師がこれまで丁寧に手当てを続けてこられたことが伝わってきました。私は「処置は丁寧にできている。それでも治りにくくしている原因が、生活の中にあるのではないか」と考えました。

暮らしの中にある「圧迫」と「ずれ」を見直す

褥瘡は、同じ場所に長く圧がかかることで起こります。また、ベッド上で身体が足元にずり下がるような動きがあると、皮膚や皮膚の下の組織にずれの力が加わります。この圧迫やずれのように、身体の外から加わる力を外力といいます。褥瘡を予防したり治りやすくしたりするためには、外力をできるだけ小さくし、同じ場所に力がかかる時間を短くすることが大切です。さらに、食事が少なくなって筋肉が落ちること、やせて骨が出っ張ること、関節が動かしにくくなった状態（拘縮）があることも、褥瘡をできやすく、治りにくくします。

そこで、普段寝ているベッドやマットレス、体位変換の方法を確認しました。エアマットは使用されていましたが、日中は奥様一人で、夜間は娘さん一人で



執筆 ▶  
西林直子

奈良県立医科大学附属病院  
看護師長